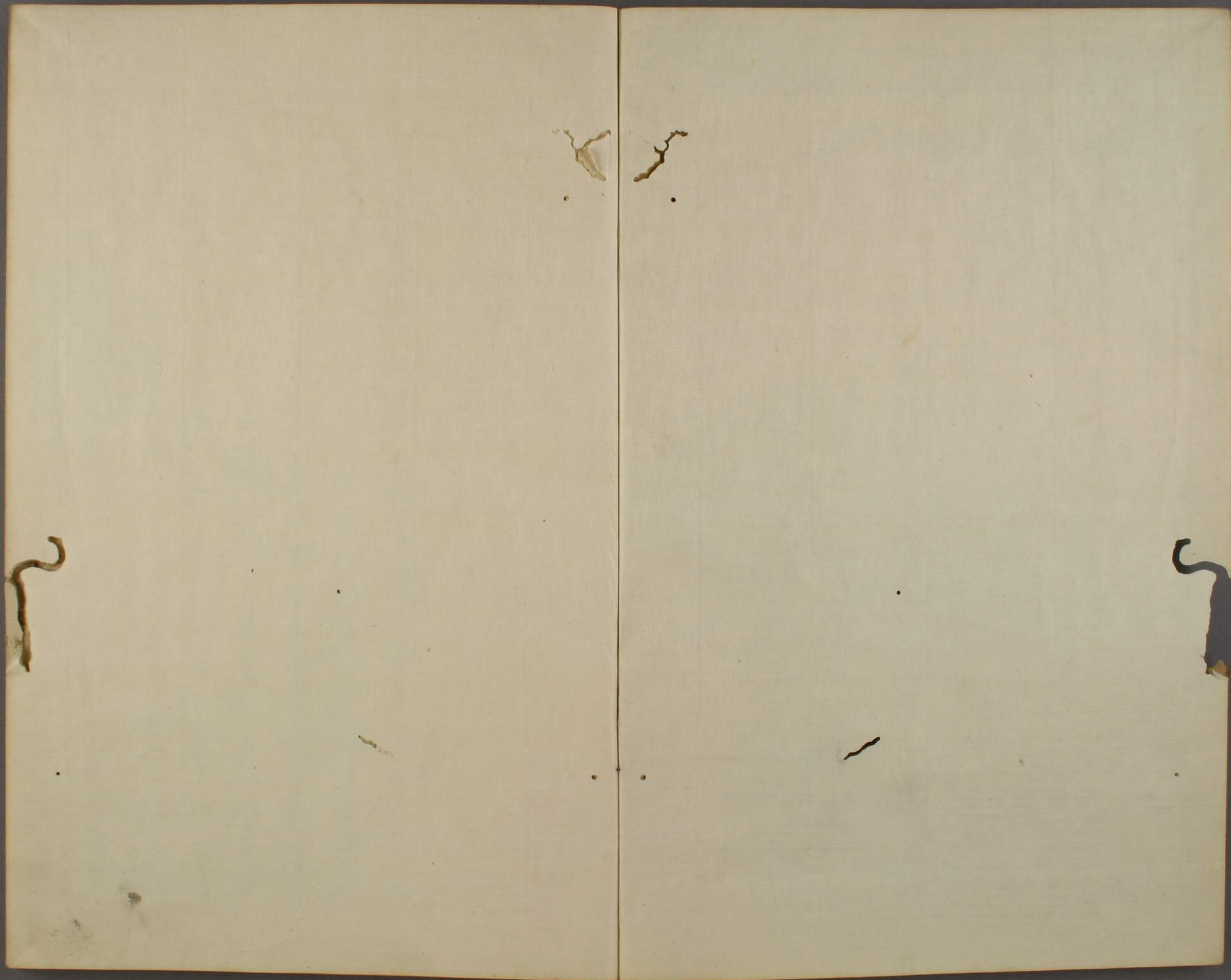


保閑雜記

卷七

5194
7







開維記卷之七

孔叢子少その先人の影相よりやまてりし
の君にれどもての鼓とてはつたると思ひ
あひしりしに洞里少あてりし影
み清音の代の衣刺の影りてあてりし
の影りしに影の影りしに影りし
白名の聖像考少あてりし聖像画くあてりし
影りたりしに影りしに影りしに影りし
影りたりしに影りしに影りしに影りし

昭和三十年
一月十八日
購求

ぬへりし

吾州より百貫千貫の知行の祿ありぬへりし
へとも字をこきりて田一坪ふ苗一坪うへとも百坪よ
る坪ふとも百坪よ千坪よ一貫ともよ何れも
十貫あるなる貫千石ふともぬるもよよよ
穀の知ともよよよ七つふともよよ米七千石
ともよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよ

水滸傳ふ店小二の林畔の酒をぬへりし
吾を欺くといふよよよよよよよよよよよよよ

あまぬ冷艶全欺雪ともありよよよよよよ
通鑑晋紀呂纂見呂超責之曰卿特兄弟相と乃敢

欺吾注今人謂相中こころ意なり

い勝ともありよよよよよよよよよよよよよ
いよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよ
府黄門との考ふ共字の語語を鳴の境よ
ともありよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよ
焼多利よよよよよよよよよよよよよよよ

志望... 河波の... 一... 如く... 新く...
 ... 作... 的... 當... 一...
 ... 一...

日本後紀桓武帝の... 製... 時... 兩...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...

東方... 鐘... 鐘... 鐘...
 ... 鐘... 鐘... 鐘...

公方様の三字法倉年中川事... 相國様
 の三字園太暦...

三秋... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...

新大玉塚の鬼つみれ、東志の山の山中の寺院の
ねくえんそとよまぬあへりしあへりし我のくま
城と身入りしとむらり新しきまふ人ありき
山あいのふい大音のまふり

今を鏝の表も終りし終りてまふあへりし
し終りたりありれり父祖の儀りの禮も終
のちふよもてあむふり終りてまふあへりし
まふりし後鏝とまふりたりし終りし主人のまふり
よりのまふりかみし送者のまふりし終りし常のまふり
時終りし終りし禮のまふりし終りし主人のまふり

し終りし終りし終りし終りし終りし終りし
馬のぬい水干袴衣の袖を少しききて將指
をまふりし終りし終りし終りし終りし終りし
いつるまふりし終りし終りし終りし終りし終りし
終りし終りし終りし終りし終りし終りし
木葉くまのあり紅毛めはれある俗に黒坊とふ
まの終りし終りし終りし終りし終りし終りし
し終りし終りし終りし終りし終りし終りし
たりし終りし終りし終りし終りし終りし終りし
厚着し終りし終りし終りし終りし終りし終りし

免つてつゝのえとていふやうにほふはしむ
の切ぢやうきさしめさうふ理ひきあうゆり
あり内室さういふもいふあんなさうの路ひき
怒りて女のふつさうなふいふもいふはしむ
てしつゝさういふ詠し列日の近つきあひさう
思ひあふやういふさうさういふさういふさう
りをさしほやうさうさういふさういふさう
いふさういふさういふさういふさういふさう
りしつゝさういふさういふさういふさういふ
かうやういふさういふさういふさういふさう

凡もあふさういふさういふさういふさういふ
とつゝさういふさういふさういふさういふ

蓬窓日録倭人能詩多有佳句有絶句云桑子
抛妻到大唐將軍何事若相妨通津橋上團日
月天地無私一樣光蓋倭人入貢則艤舟定海
之通津橋而妨閑之法頗嚴故其詩云然
又云賦范蠡五湖而附以載西子事賦秦長城
而附以婦哭城崩事賦漢四皓於商山而言圍
碁之事皆無本源出處又曰張騫無乘槎事乘
槎乃海上客毛室無放龜事放龜乃武昌軍毛

室所統之人而今例以張騫乘槎毛室放龜為
言噫事類此失實者多矣いふも附乞の從明ふ
とむへき事いふ

脱肛のいへいゆらうらうらうらふ鹿の肛油を脱肛
ふつ帯えんふやくやうらうらうら右も身推はれ
たらうらうらうらうらうら

つこ弓いつこれ木うらまゆらうらうら木あり
ゆらの上林ふれらうらあつらゆを真弓とらふ
まここれらうら木の名うらうらうらうら
弓とらうらうらうらうらうらうら同物とらうら

あやまらうらうらうら夏山至りてあけらうらうら
らやこふの葉いへうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
みらうらうらうらうら木理のうらうらうらうら
中小横うらうらうらうらうら木理あうらうら
相州大山の邊うらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
秘をうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうら

信一用ゆるまゝにたのむるのみか丹書の敬念の
二川よりわたり神とて齊戒礼をまゝにすを武王
にまゝたまり太公望の意ありてふ人ふ志を
人志といふことありてしるはあつた神とす
ゆも秘すふたりのしるは多くの書籍しるは
ゆもこれ秘する人の志をたのむるしるは
のろそたる志ありて書籍得るべきしるはあつた
して聞見を以て語めてるしるはあつたしるはあつた
生の薬秘すも秘して人も信し人も信して薬の効
もいふことありてしるはあつたしるはあつた

濟生の心はたかく私を利するれはる多きこと
墓目、武林原始少初、その略あり伊勢氏も此説は
尚ふ目、穴のふたありてしるはあつたしるはあつた
へん鳴弦なるといふれ、秘を以て目れ略ふやある
へんをこれ、撒扇のりか、目の目とてしるはあつたしるはあつた
たしるはあつたしるはあつたしるはあつたしるはあつた
るあ名つけしるはあつたしるはあつたしるはあつた
うふ穴ありしるはあつたしるはあつたしるはあつた
たしるはあつたしるはあつたしるはあつたしるはあつた
天明癸卯のしるはあつたしるはあつたしるはあつた

山も此の農夫隣家へ行くの妻子飢死せる中
男子は生もの二三日も過ぐ死へ死す
死すも志のいふれども一と死のへと死す
たうく功のなりたす其肉をけく
つといふも隣夫も悦びて子をけ
ぬ農夫身居るつの子はけく肉をけ
り隣夫をけり計略のなり肉をけ
るる庖丁も志のいふれども一と死のへと死す
あつた聞ふも志のいふれども一と死のへと死す
ひやうの家をけり計略のなり肉をけ

よもかき書しと死する書とるる百分一
あつた聞ふも志のいふれども一と死のへと死す
ひやうの家をけり計略のなり肉をけ

東山にて喰いあつるの書一山はこれ幸とて
一辰のそらねるや予もこの救荒のすのこらね
とひしもの青葉いつれかまこわすれしとて
れいりやうもまきまきのころそ飢人かきやう
おひりつひらきつある日客ふりくふく椀のちと取
ぬふ山耕の芽とれしころあつる芽出しをき
ころあつしころや山椒も芽とるころはひりし
あつらなくふころそえころれしころはひりし
ぬ主人あやしころそころつそ其事もせそ
ふり笑ひ店しふあつき

羽州秋田の城より北東少あつる海中へし出たる地
ありとあつるのみぬれ島山の如くそあつるこれ
地よりあつる杉や世も秋田杉とてあつるこの山を男座
山とてあつる赤神山といふあり其山上小神を五
社まつるあつる一つ漢武帝一川蘇武との餘りの國の
神たりとあつる海乃向ひ白奴の地とて蘇武の
牧羊せしころあつるあつるあつるあつる
庄内と秋田領の境も女鹿とて所あり来由し
たつるあつるあつるあつる小岩の洞あり八月のあ
つる汐高しころあつる小船に乗る洞穴のあつるへ

こゝへ半道をうみ自然と洞のうら明ら
らるやうく小潮をくく船膠しそくかうこ
比船よりゆり穴は廣く清く多砂うけ
ぬふ潮もさうく陸地もぬさうく河川を見や
れ遠山つら樹木もくく人家のやうなもえ
て景色は異なりこれに乗る小船をゆりひ
り川に返家の道ゆきと紙をゆりひくあへる
とふもつにゆり人家も秋田邊もあ
へ土地のよきまあり

熊野のあつ小徐福村ふありその村長の家居やう

かきくも本もむあをえーれぬ木も作りあ木
は多しそつふ古文書うこの長書籍このむら亦雅
礼記も存と書出してをう古寫本も普通の
ものもあつ一人のゆりものありこの徐福の
祭の船も童男童女をうけ海へり出してつる
例ありこれらもゆりたし多きものなり

白川の瀬もつちふありしやさう今の真野の境
玉津島の明神の社あを古瀬のあつひひり
この道は豊臣家のゆりこもゆり山
つ山つり旗宿村のゆりあ葉のあけ

此ふハカヤも極めたるよし未のとき大任やふ
あつても午未六年の時より微力や盡
したるにつれて辭職の致さひけりもは
のりておれりしうたへし家のおりも
大にありしものりし治術もよりし
つしとて多くの諸侯志ある人におり合し
とてある人しとて其家の重臣ふ
とて言しし多るも少ありて来客多
し免職の身は應りてし優游して寵
恩と蒙り太平の化と樂しむ志川ふ終る所

ふりておれりしうたへし家のおりも
大にありしものりし治術もよりし
つしとて多くの諸侯志ある人におり合し
とてある人しとて其家の重臣ふ
とて言しし多るも少ありて来客多
し免職の身は應りてし優游して寵
恩と蒙り太平の化と樂しむ志川ふ終る所
君子もあつてしれりてし
の政事もあつてし行ひてし
ある大政もあつてし身もあつてし
ありてし我もあつてし人々もあつてし
うたへし勢のありてし
にありてし人々もあつてし年月大
小の政事もあつてし
ありてし文書のありてし
ありてし決断もあつてし

たゞ聖の如く「六名教中」を多しはむきくやうに
高く浅きやうにありて濁り江の水にうまきお
りててもあましく底をい淵にあまきやうにほもあまき
うまき

讀書樂趣曰上學以神聽中學以心聽下學以
耳聽以耳聽者學在皮膚以心聽者學在肌肉
以神聽者學在骨髓と云ふ論ありては、
も亦者書しては、
いさうえもあまきうまきあり胸中雜慮お
かしく心の照りて統一ありては、
又邵子の

心安吟詩と云ふの如く心安身自安
安室自寛心
與身俱安何事能相干誰謂一身小
其安若泰山誰謂一室小
寛如天地間
かまの心は、
られし心は、
旋周旋と云ふは、
かまの心は、
いあやうあり孔子の喪ありては、
かまの心は、
かまの心は、
かまの心は、

左傳隱七年陳及鄭平陳丑父如鄭涖盟壬申
及鄭伯盟歆如忘洩伯曰丑父必不免不賴盟
矣桓五年陳亂

桓九年曹太子來朝賓之以上卿禮也亨曹太
子初獻樂奏而嘆於父曰曹太子其有憂乎非
嘆處也

僖十一年天王使召武公內史過歸晉侯命受
王情過歸告王曰晉侯其無後乎王賜之命而
情於受瑞先自棄也已其何繼之有
文十七年襄仲如齊拜穀之盟復曰臣聞齊人

將食魯之麥以臣觀之將不能齊君之語偷減
文仲有言曰民主偷必死

宣十四年秋九月楚子圍宗冬公孫歸父會齊
侯于穀見晏桓子與之言魯樂桓子告高宣子
曰子家其亡乎懷於魯矣懷必貪々必謀人謀
人々亦謀已一國謀之何以不亡

宣十五年晉侯使趙同獻狄俘于周不敬劉康
公曰不及十年原林必有大咎天棄之魂矣
成四年公如晉々侯見公不敬季文子曰晉必
不免詩曰敬之敬之天惟顯思命不易乎夫侯

之命在諸侯矣可不敬乎

成六年春鄭伯如晉拜成子游相授王于東楹之東士貞伯曰鄭伯其死乎自棄也已視流而行速不安其位宜不能久

成十三年晉侯使卻錡來乞師將事不敬益獻子曰卻氏其亡乎禮者身之幹也敬身之基也卻子無基且先君之嗣卿也受命以求師將社稷是衛而惰棄君命也不亡何為

成十三年如京師及諸侯朝王遂從劉康公成肅公會晉侯伐秦成子受賑于社不敬劉子曰

吾聞之民受天地之中以生所謂命也是以有動作禮義威儀之則以定命也能者養之以福不能者敗以取禍是故君子勤禮小人尽力勤禮莫如致敬尽力莫如敦篤敬在養神篤在守業國之大事在祀典我社有執燔我有受賑神之大事也今成子惰棄其命矣其不反乎成十四年衛侯享苦成叔甯惠子相苦成姊傲甯子曰苦成叔其亡乎古之為享食也以觀威儀省禍福也今夫子傲取禍之道也襄七年衛孫文子成聘公登之登井孫楨子相

趨進曰諸侯之會寡君未嘗後衛君今吾子不
後寡君寡君未知所過吾子其少安孫子無辭
之無後容穢叔曰孫子必亡為臣而君過而不
後亡之本也

襄十年春齊高厚相太子光以先會諸侯于鍾
離不敬士蒞子曰高子相太子以會諸侯將社
稷是衛而皆不敬棄社稷也其將不免乎

襄二十一年會于商任銅鑿氏也齊侯衛侯不
敬并向曰二君者必不免會朝禮之經也禮以
之與也以身之守也怠禮失政失政不立是以

亂也

襄二十八年蔡侯歸自晉入于鄭鄭伯享之不
敬子產曰蔡侯其不免乎曰其過此也君使子
展延勞於東門之外而傲吾曰猶將更之今還
受享而惰乃其心也君小國事大國而惰傲以
為己心將得死乎若不免必由其子其為君也
淫而不父僑聞之如是者恒有子禍
襄三十一年穢并至自會見孟考伯語之曰趙
孟將死矣其語偷不似民主且年未盈五十而
諄々焉如八九十者弗能久矣若趙孟死為政

者其韓子乎吾子盍與季孫可以樹善君子也
孝伯曰人生幾何誰能無偷朝不及夕將安用
樹穢非出而告人曰孟孫將死矣吾語諸趙孟
之偷也而又甚焉

昭元年天王使劉定公勞趙孟於賴館於維內
劉子曰美哉禹功明德遠矣微禹吾其魚乎吾
與子弁冕端委以治民臨諸侯禹之功也子盍
之遠績禹功而大庇民乎對曰老夫罪戾是懼
焉能恤遠吾儕偷食朝不謀夕何其長也劉子
歸以語王曰諛所謂老將知而耄及之者其趙

孟之謂乎為晉正卿以主諸侯而儕於隸人朝
不謀夕棄神人矣神怒民叛何以能久趙孟不
復年矣神怒不歆其祀民叛不即事祀事不從
又何以年

昭十一年单子會韓宣子于戚視下言徐叔向
曰單子其將死乎朝有著定會有表衣有禮帶
有結會朝之言必聞于表著之位所以昭事序
也視不過結會之中所以道容只也言以命之
容只以明之失則有闕今单子為王官伯而命
事於會視不登帶言不過步只不道容而言不

昭矣不道不共不昭不從無守氣矣十二日單
成公卒

昭二十五年宋公享昭子賦新宮昭子賦車轄
明日宴飲酒樂宋公使昭子右坐語相泣也樂
祁佐退告人曰今茲君與并孫其皆死乎吾聞
之哀樂而樂哀皆喪心也心之精爽是謂魂
魄魄去之何以能久

昭三十二年十二月晉魏舒韓不信如京師合
諸侯之大夫于狄泉尋盟且令城成周魏子南
面衛彪偃曰魏子必有人咎其位以令大事非

其任也

定十五年春邾隱公來朝子貢觀焉邾子執玉
高其容仰公受玉卑其容俯子貢曰以禮觀之
二君者皆有死亡焉夫禮死生存亡之禮也將
左右周旋進退俯仰於是乎取之朝祀喪戎於
是乎觀之今正月相朝而皆不度心已亡矣嘉
事不體何以能久高仰驕也卑俯替也驕近亂
替近疾君為主其先亡乎夏五月公薨仲尼曰
賜不幸言而中是使賜多言者也
禮記曰君子之容舒遲見所尊者齊遯足容重

手容恭目容端口容心容靜頭容直氣容肅
立容德色容莊
又曰古之君子必佩玉右徵角左宮羽趨以采
薺行以肆夏周旋中規折還中矩進則揖之退
則揚之然後玉璫鳴也

